様　式　Ｃ－４１

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：９９９９９
研究種目：奨励研究
研究期間：2021～2021
課題番号：２１Ｈ０３８７４

研究課題名　　古墳時代における冠の技術系譜

研究代表者
土屋　隆史（TSUCHIYA, TAKAFUMI）

宮内庁書陵部陵墓課・宮内庁書陵部

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　290,000円

研究成果の概要：　本研究の結果、飛鳥時代前半の冠は「1　広帯二山式冠との共通性が認められるもの」、「2　百済の銀花冠飾の影響を受けたもの」、「3　連珠円文がみられるもの」の3つの技術系譜に分類できると考えた。 2・3は、6世紀末～640年代頃にかけて百済から渡来した工人集団、1は5世紀後葉頃から日本列島で広帯二山式冠の製作を担ってきた工人集団によって製作されたものであろう。1と2・3の工人集団が互いに交流した様子はみられない。やがて2・3の工人集団は仏教荘厳具などの製作を担うこととなり、1の工人集団は消えていくことになるが、その過渡期の様相を確認することができた点は一定の成果であると考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　飛鳥時代前半には、百済から渡来した工人集団が製作した冠と、古墳時代以来の在来工人集団が製作した冠が一部併存することを確認した。仏教荘厳具等を製作した主流の工人集団は前者であり、後者は飛鳥時代後半には消えていくことになる。美術史の既往の研究において古墳時代の金工品は等閑視されることが多いが、飛鳥時代前半におけるこのような過渡期の状況をふまえることで、飛鳥時代における金工品の出現過程を理解しやすくなるという点に、本研究の学術的意義があると考える。

研究分野：考古学

キーワード：古墳時代　飛鳥時代　冠　工人集団　仏教荘厳具　百済

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究の目的

本研究では、ＴＫ４３～飛鳥Ⅰ新型式期（６世紀後葉～740 年頃）にかけてみられる金銅製・銀製冠を分析対象とし、これらの技術系譜について検討した。これにより冠の製作に関与していた工人集団の動向を探ることを目的とした。

２．研究成果

これまで冠の技術系譜は冠形式ごとに論じられてきたが、冠形式相互の系譜関係についての検討は深められていない。そこで本研究では、冠形式を横断した視点で、技術系譜について検討することとした。

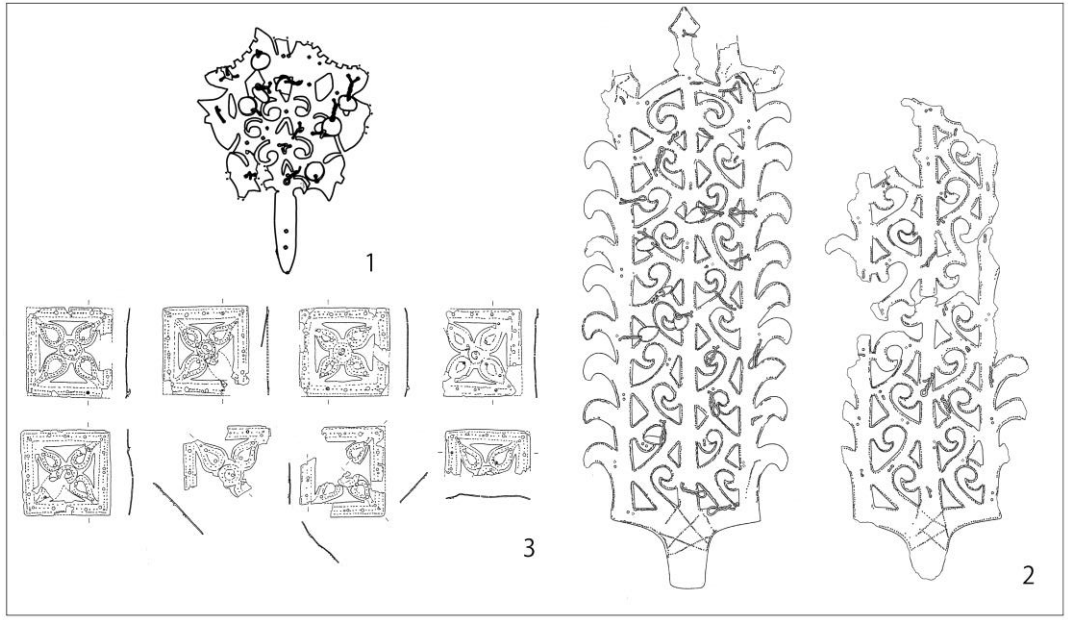
資料調査で得たデータをもとに分析した結果、冠は「①広帯二山式冠との共通性が認められるもの（島根県鷺の湯病院跡横穴墓、千葉県金鈴塚古墳、千葉県松面古墳例など）（図 1～3)」、「②百済の銀花冠飾の影響を受けたもの（香川県母神鑵子塚古墳、山梨県平林２号墳、千葉県浅間山古墳例」（図 4～6)）、「③連珠円文がみられるもの（静岡県涼ノ御所古墳、千葉県浅間山古墳、茨城県武者塚古墳、福岡県銀冠塚古墳例など）（図 7～10)」の３つの技術系譜に分類できると考えた。

②・③は、TK209～飛鳥Ⅰ新型式期（６世紀末～640 年代頃）にかけて百済から新たに渡来した工人集団によって製作されたものであると考えられる。冠にみられる特徴的な現象としては、飛鳥時代に入って百済系工人集団が新たに渡来しても、５世紀後葉頃から日本列島で広帯二山式冠の製作を担ってきた工人集団によって製作されたもの（①）が依然として確認できるという点である。①と②・③に共通する文様や技術はみられないことから、これらの工人集団が互いに交流した様子はみられない。やがて、②・③の工人集団は金銅製仏像や仏教荘厳具、装飾馬具などの製作を担うこととなり、①の工人集団は飛鳥時代後半には消えていくことになるが、その過渡期の様相を冠で確認することができた点は、当時の工人集団の動向を探るうえで一定の成果であると考える。

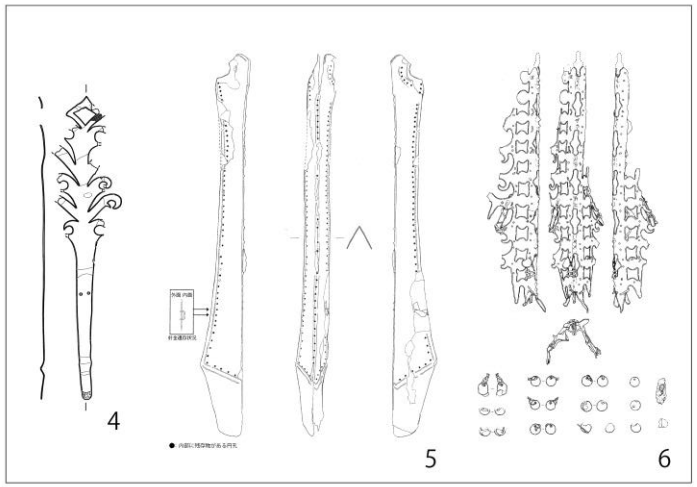
美術史の既往の研究において古墳時代の金工品は等閑視されることが多いが、飛鳥時代前半におけるこのような過渡期の状況をふまえることで、飛鳥時代における金工品の出現過程を理解しやすくなるという点に、本研究の学術的意義があると考える。

図面出典

図－１：山本清 1984「横穴被葬者の地位をめぐって」『島根考古会誌』1　島根考古学会の図面に加筆し再トレース。２：松本勝・井上賢編 2020『金鈴塚古墳出土品再整理報告書』第１分冊本文編、木更津市教育委員会より引用。３：白石太一郎・白井久美子・山口典子編 2002『千葉県史編纂資料　千葉県古墳時代関係資料』千葉県より引用。４：筆者実測（観音寺市教育委員会所蔵)。５：北澤宏明 2019「山梨県笛吹市平林２号墳出土資料の再検討－金銅製冠飾の可能性－」『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要 35』、pp. 67-79 より引用。６：千葉県史料研究財団編 2002『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』第１分冊、千葉県より引用。７：大谷宏治 2004「浜北貴人の装い－涼ノ御所古墳出土鍔付冠帽について－」『浜北市史　資料編　原始古代中世』浜北市より引用。８・10：白井久美子 2002「３出土遺物について（１）冠」『千葉県史編さん資料　印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』千葉県史料研究財団、pp. 135-147 より引用。９：渡辺正気 1963「銀冠塚（八尋１号墳)」『銀冠塚　鞍手郡鞍手町八尋および神崎の古墳の調査』(福岡県文化財調査報告書第 28 集)福岡県教育委員会、pp. 7－20 より引用。

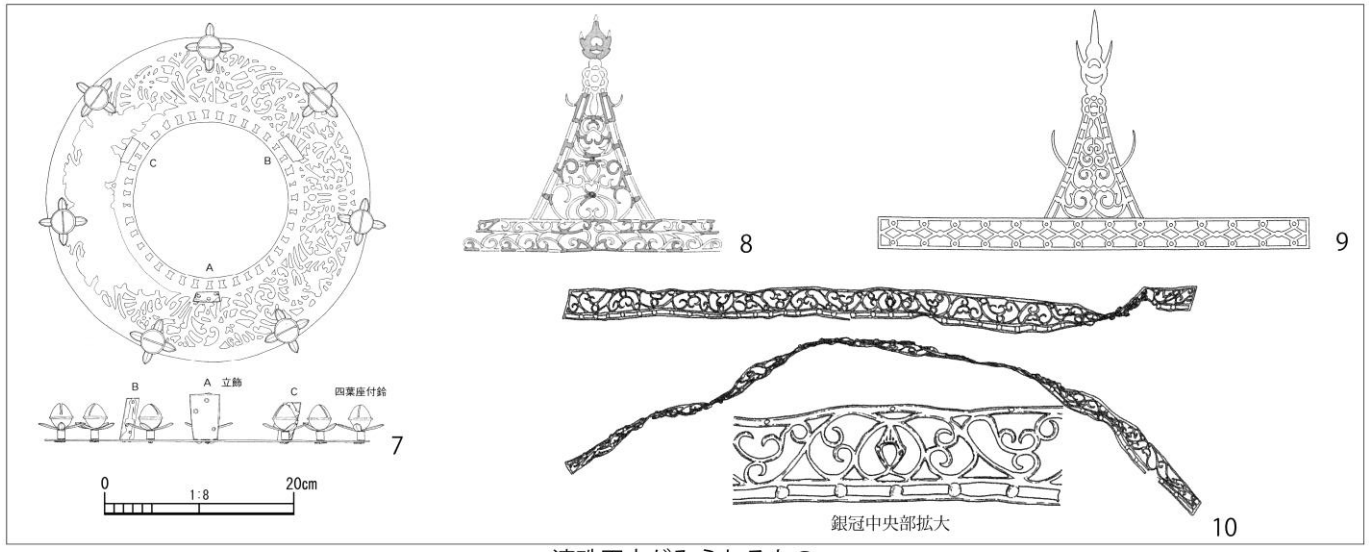


広帯二山式冠との共通性が認められるもの



百済の銀花冠飾の影響を受けたもの

0 1:5 25cm



連珠円文がみられるもの

1. 島根鷺の湯病院跡横穴墓
2. 千葉金鈴塚古墳
3. 千葉松面古墳
4. 香川母神鑵子塚古墳
5. 山梨平林２号墳
6. 千葉浅間山古墳
7. 静岡涼ノ御所古墳（復元模式図）
8. 千葉浅間山古墳（復元模式図）
9. 福岡銀冠塚古墳（復元模式図）
10. 茨城武者塚古墳

図　古墳時代後期～飛鳥時代における冠の技術系譜（7はs=1/8、その他はs=1/5）

主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

1．著者名 土屋隆史	4．巻 767
2．論文標題 古墳時代における貴金属製装身具の受容様相	5．発行年 2022年
3．雑誌名 考古学ジャーナル	6．最初と最後の頁 pp.6-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 土屋隆史
2．発表標題 金工品からみた古墳時代の対外交流
3．学会等名 歴史と文化を学ぶ会（招待講演）
4．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

1．著者名 土屋隆史（共著）	4．発行年 2022年
2．出版社 雄山閣	5．総ページ数 pp.35-40
3．書名 「千葉県山王山古墳出土「冠」の再検討」『人・墓・社会－日本考古学から東アジア考古学へ－』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

研究組織（研究協力者）

氏名	ローマ字氏名